

「広川町日本遺産ガイドの会」が スタートしました

平成30年に広川町のストーリー「百世の安堵～津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産～」が日本遺産に認定されました。町では、それ以来「日本遺産ガイド」を養成するために町内から希望者を募集して、養成講座が実施されてきました。昨年末、その講座が終了しました。今年になって名称を決め、活動方針等を相談しながら発足に向けて準備をすすめていました。

4月11日、「広川町日本遺産ガイドの会」として会員17名で発足しました。

広川町では、「広川町語り部サークル」が平成16年から、語り部活動をしてきました。東日本大震災の直後から2年間は、あの災害を目の当たりにして、津波に無関心では居られないと思っ



たのでしょうか、「稲むらの火の館」の見学者が増えました。同時に、濱口梧陵翁らが築造した「広村堤防」等の周辺の見学も増えました。このように、「語り部」は活発に活動しました。多い年は年間300団体以上案内したものでした。

この程、「ガイド養成講座」が終了してその参加者により、「日本遺産ガイドの会」が発足しましたので、「語り部サークル」は解散しました。

「日本遺産」は構成文化財は26箇所あります。総ては時間がかかると思いますが、皆様をご案内しようと、会員のみみんなは張り切っています。

広川町の防災遺産は、負の遺産ではありません。先人たちが、災害に津波に、立ち向かった経過です。全日本遺産104の中でも、防災遺産はただ一つです。「稲むらの火の館」と共に「日本遺産」は広川町の誇りです。ゆっくり見学して回りませんか。

気象庁制作(マンガで解説)

「南海トラフ地震」資料配布!!

気象庁が制作した「南海トラフ地震～その日が来たら～」という資料を和歌山地方气象台からいただきました。希望される皆様に配布してください、とのことでした。



避難しなければならないような地震が起こった時、どう対応するかマンガで説明されています。マンガといえば、子ども用と思いがちですが、大人の人にも分かりやすく書かれています。

「稲むらの火の館」に自由にお持ち帰りいただくようにしています。

日本遺産PRコーナー

「稲むらの火の館」

3階に、広川町の日本遺産PRコーナーがあります。26の構成文化財の案内があります。ぜひどうぞ。



<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

*記念館だけの入場は無料です

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第2回 和歌山県北部地震に学ぶ

わたしと広川町とのご縁がはじまったのは、2011年の7月5日に起きた「和歌山県北部地震」に関する避難行動調査からです。震源は広川町の直下約7km、地震の規模はM5.5、最大震度5強の揺れがおそいました。役場のガラスが割れるなどの被害が出たことをご記憶のかたもいらっしゃるのではないのでしょうか。東日本大震災が発生してからまだ4か月ほどのタイミングでしたので、「すわ、南海トラフ地震か」と、多くのかたが肝を冷やしたことかと思えます。

広川町のあちこちに設置してある「現代版・稲むらの火」の感震器が作動して、警報を伝えるサイレンが街中に鳴り響き、住民のなかには「念のため避難しておこう」と行動した人がいました。八幡さんまで足を運んだ人が（少なくとも）百人ほどいたことがわかっています。

実はこのとき、テレビではいち早く「津波の心配はありません」とテロップを表示していました。となると、八幡さんを目指した人は、単に“無駄足を踏んだ”だけの“うっかりさん”だったのでしょうか。

わたしは、そうは思いません。梧陵さんがいまの世にいたら、「念のため、高台に逃げておこう」とおっしゃったのではないかと想像します。現代の利器も、そして、高解像度の災害情報も、ぜひ活用すべきです。しかし、「練習だと思って」、「空振りをおそれずに」、「ご近所さんと声を掛け合って」八幡さんを目指した人たちは、大切な「率先避難者」だと思います。逃げない理由ばかりを探して何もしないでいたら、自然の猛威、いわゆる「想定外」に打ち勝つことはできません。こころの余裕をもって真摯に「逃げ時」をキャッチできる人こそ、次世代の梧陵さんにふさわしいと言えるのではないのでしょうか。次回のコラムでは歴史の中から、この類例をお示ししたいと思います。

夏の夜かたり

(第6回)

広村郷土史(明治42年)

渋谷家文書

浦賀に於て出来事等くわしきことは近世紀聞に有り。故に略す斯如く国中大恐怖の際に、広村に大海嘯が迫りたりしなりき。

梧陵翁は広村の困難をすくはんとて其方法として、其原因たる荘屋の多きこと、之れに対する給料其他宮掛り等の冗費はぶかんとせり。其れに対する止むを得ざる費用は自ら出支して自ら苦心せられたるなり。之れには吉右衛門氏、岩崎氏等も支出せられしことは云へ、其苦心せられたることは翁のみなり。

「つなみ」に「すすき」へ火を付けし如きは決して大恩と云うにあらず、広村永遠の救済策を講せられしことこそ大恩有之所謂なり。此際海防策起り、広村に於ても浦組三十名を組織して、鉄砲方なるものを作りて海岸を防ぐことに尽力せしめ、渋谷も鉄砲方に出たのである。此時に各郡に於て一名つゝの名士秀才を置、郡長の如き職を取らしめ、翁は有田郡小参事に任ぜられたり、広村を盛かんならしめんとられし翁は有田郡全般の事に関せざるべからざるに至りしかば、翁は小参事になられて盛に殖産興業につとめられ、広村に広商会を設けたり。有田商会も出来たり、広商会は井爪与次兵衛は同頭取、浜口七右衛門は副頭取、浦清兵衛は支配人。店員には津森源七、上田惣助、渋谷伝八、浦清兵衛、児島庄右衛門、帳方山口幸助にて辻の桶屋の所にて初めたるなり。其頃は日本諸大名は金を要すること非常にして従て贋金をつくりたり。当時は金本位なりしも内実は銀本位の様になりたり、紀州には盛に紙幣を発行し正金は上に取り上げられて紀州は大に卑幣(疲弊)せり。当時の取引の困難なりしことは贋の多きことによりて、最も商人は苦められたるなり。其後明治二三年頃に至りて翁か紀伊大参事となられたり。

此時米価急に高くなり、広商会も米の取引盛にやり結果一万四千万(円)の損失となりしかば、濱口翁に相談に行きたりしが金を出してもらはけに行かず、各員は二三千両の割当も支出せざるべからず。(つづく)